

ICCEES で独自パネルを立てるメリット

木村 崇

私は 2005 年にベルリンで開催された ICCEES に参加しました。声をかけてくれたのは現在ロシア文学研究所（プーシキン館）所長をしているバグノ氏です。彼とは 1991 年からプーシキンゆかりの地を廻って隔年で開催されていた国際プーシキン会議で知己を得ました。その彼が 2004 年に「翻訳」をテーマとするパネルの司会役をやってくれと頼んできたので軽い気持ちでベルリンへ行きました。自分たちでパネルを用意する形の国際会議は初経験でした。一方プーシキン会議の方は、何を語ってもいいのですが、基本的には「一人語り」です。私は第 2 回から生誕 200 年を祝う第 5 回まで欠かさず参加したのですが、その中身についてはじつはかなり失望しておりました。

ソ連崩壊後もロシアのロシア文学者たちは基本的にいわば「自国中心主義」的であったように思います。バグノ氏はそういう傾向に批判的でした。一方、私の不満は「ロシア・オリエンタリズム批判」の観点を込めて毎回プーシキンの作品やレールモントフとの比較などをやったつもりですが、これに対してロシアの研究者で反応した人はほぼ皆無でした。記念の第 5 回はペテルブルグ、オデッサ、トビリシ、モスクワと 4 箇所をチャーター機で廻って開催されました。私はトビリシでの報告だったので少し挑発的にやったのですが、地元グルジア人の大物研究者（名前は覚えていません）にはうさんくさい奴だという印象を与えたようでした。一緒にいた人たちのなかで私にわりと好意的だったのはイエゴーフさんだけだったように記憶します。ロシアの研究者たちは、ヨーロッパやアメリカの研究者たちの間で流行っていた研究方向にたいしては、けっこう関心を寄せていたようですが、どうやら当時のロシアではサイドはほとんど読まれていないということが後で分かりました。私は決してサイドの尻馬に乗った研究をしたわけではありませんし、レールモントフやトルストイとカフカーズとの関係を研究する中で、サイドとは別途に問題の所在には気づいていたつもりです。だから、インドのロシア文学者カルパナ・サヘーニの書いた『ロシア・オリエンタリズム』のようなトンデモ本の日本語訳が出ますと、本学会の会誌に全面批判の書評を書いたわけです。カフカーズをあつかったロシア文学を研究する上で独自の「ロシア・オリエンタリズム」論を構築する必要性を感じていたのは中村唯史さんや乗松亨平さんではなかったかと思います。ですから、もしこういう人たちと一緒にパネルを組んで国際的な場所でアピールしていれば、多少なりとも日本のロシア文学研究が世界のロシア文学研究に刺激を与えることが出来たのではないかと考えています。

国際会議と言えば北大のスラブ研究センターが年二回かそれ以上に開催していますし、それに参加した人たちも結構な数に上るのではないのでしょうか。ただ、スラ研の場合は、

パネルの立て方はスラ研主導なため、招かれた報告者が自分のペーパーで訴えるべき内容はその大枠に制約されます。その点、ICCEES は自前で準備するわけですから、何の制約もなく自分たちで自由に組めるわけです。このメリットは何ものにも替えがたいと思います。

文学研究はどうしても個人の技量にまかせて、書齋に引きこもって他者にまねの出来ない意匠をこらすというスタイルに陥りやすいように思います。それはそれで意義のあることだと思いますが、徒党を組んで技を競い合う試みも無駄ではありません。2015 年の ICCEES 大会は幕張で開かれるのですから、絶好のチャンスです。独房のような研究室や書齋から抜け出て、共通のパネルを組める仲間探しに出てみませんか。ただしその場合、仲間のうち少なくとも一人は日本人以外でなくてはなりません。それが唯一の制約です。

ICCEES 幕張大会へのパネル申請—どう組み立てるか？

野中進（nonaka@mail.saitama-u.ac.jp）

以下に述べるのは、2015 年 ICCEES 幕張大会にパネル申請を考えている人が、どのようにパネルを設計し、実現までこぎつけるかに関する話題作りである。意見交換の一助となれば幸いである。

前提

- ・単独申請でも何ら問題ない。プラスとマイナス。
- ・だが、パネルにはパネルの面白さ、楽しさがある。プラスとマイナス。
- ・パネルを組むのはそんなに大変なことではない。

ストックホルム大会（2010）での文学系パネル

- ・あくまで概算だが、（狭義の）文学研究のパネルは全体数（360 以上）の一割弱。思想史や文化論、文化史などを併せれば、二割を越える。
- ・作家でしぼったパネル（ソローキン、フレーブニコフ、チェーホフ、プーシキン、ベールイなど）も、テーマでまとめたパネルも（ロシア文学と東アジア、ロシア文学における母性の表象など）あった。
- ・文学関係での日本人研究者参加は、十名強といったところ。日本人研究者が中心に組まれた文学関係のパネルは五つ。
- ・北欧の参加者が目立った。やはり地の利というものがある。

幕張大会（2015）について言えること

- ・アジア・極東ロシアの参加者が多くなるだろう。地の利を生かしたい。
- ・「たんに国際的なだけでなく、学際的なパネルをより多く」（by JCREES 代表）
- ・「幕張ではホスト国としていろいろなしかけができるだろう。遊び、ゲーム、エクスカージョンなど」（by 前日本ロシア文学会長）

パネルを組む際の具体的論点

- ・国際性…二か国以上の出身者から構成されていることが条件。外国人研究者を一人呼べばよい。
- ・使用言語…ロシア語でよい。お望み・必要ならば英語で。1 パネル内で二言語状態でも問題ない。

- ・構成…司会 1 名・コメンテータ 1 名・報告者 3 名のパターンが多いが、司会とコメンテータを兼ねてもよいので、最低 4 名いれば構成できる。
- ・時間…1 パネルに与えられる時間は 90 分。
- ・エントリー審査…学術的な性格のものであれば、まず問題ない（らしい）。
- ・資金面…外国人研究者を招く場合、もっとも問題になるところ。原則論と現実論（しかしロシアの変化も著しい）。

外国人研究者を招く場合の資金について

- ・募集時期・招へい期間などについては随時、関連団体の HP を参照されたい。
- ・研究経費の使い方については大学によってルールが違うことがあるので、所属大学の事務との早めの連絡・相談がとても大切。

A) 日本学術振興会 (<http://www.jsps.go.jp/index1.html>)

- 1) 科研費…予算と研究テーマが許す範囲で複数の研究者が招へいできるので、もっとも便利な予算か。今年の申請（2014 年度分）はもう多くの大学で締め切っただろうが、来年秋の申請（2015 年度分）でもまだ間に合う。
- 2) 外国人招へい研究者事業…「短期」と「短期 S」が適当。一回の申請につき、一人しか招へいできないので、効率は悪い。短期の採択率は 32～33%（平成 25 年度）。短期 S は「ノーベル賞級の学者」対象となっていてハードルが高いが、申請数も少ないので狙って申し込めば当たるかもしれない（平成 25 年度は申請数 5/採択数 3、ただし人文系では 1/0）。2015 年 8 月の来日だと、募集時期は 2014 年 9 月になるだろう。
- 3) 二国間交流事業「共同研究・セミナー」…あらかじめ対象国が決まっている「共同研究・セミナー」に加え、どの国とでも原則 OK の「オープン共同研究・セミナー」が新しくできた。一つの国（たとえばロシア）から複数の研究者を招へいしたい場合、申請してみる価値はあろう。直近の募集は 2014 年 2 月締切分（2013 年 12 月に募集要項が公開）。募集回数が多い（一年に二回）のは利点。
- 4) 二国間交流事業「研究者交流（特定国派遣研究者）」…特定の国（中欧・バルカンではブルガリア、チェコ、ポーランド、ルーマニア、スロヴァキア、スロヴェニアの名前が挙がっている：<http://www.jsps.go.jp/j-bilat/tokuteikoku/gaiyou.html>）から研究者交流の名目で招へいできる。学会への参加も認められている（ただし、国ごとに申請ルールが違うこともあるので上記 HP で確認されたし）。2015 年 8 月の来日だと、2014 年 9 月の申請になる（2014 年 7 月には募集要領が公開）。

B) それ以外

- 1) 所属大学の校費（研究費）
- 2) 所属大学の独自の外国人研究者招へいプログラム
- 3) 種々の民間財団の学術資金（たとえば以下のサイトを参照：

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/research/researchinfo>)

- 4)（日本研究者であれば）国際交流基金「日本研究フェローシップ」：

<http://www.jpjf.go.jp/j/intel/study/fellowship/index.html>

- 5) V4（チェコ、スロヴァキア、ポーランド、ハンガリー）がらみであれば、2014 年は「V4+日本」交流年として政府・外務省がいろいろ催し・公募をやるはず。要チェック：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/europe/v4+1/index.html>

この場を借りてアナウンス！2014 年 1 月 25 日（土）11:00-18:00、上智大学にて、The Evolution of Russian Culture of the Twentieth Century: An East Asian Perspective という国際セミナーを開きます（使用言語はロシア語）お気軽にご参加ください。日本、韓国、ロシアの研究者が報告します。ロシア語で討論する練習になります。詳しくは以下を参照：<http://nonakasusumu.jimdo.com/>

“Женская Маньчжурия” 「女たちの満洲」

司会：坂本秀昭（天理大学）

コメンテーター：オリガ・バキチ（トロント大学）

報告者：生田美智子（大阪大学）

伊賀上菜穂（中央大学）

藤原克美（大阪大学）

エレナ・アルリレネ（ハバロフスク国境大学）

今回のパネルは 2010 年にストックホルムで開催された第 8 回 ICCEES 世界大会における、「アジアにおけるロシア系移民の文化遺産」と題したパネルを受けたものである。ストックホルムでは、伊賀上菜穂（中央大学）、藤原克美（大阪大学）、エレナ・アウリレネ（ハバロフスク国境大学）、オリガ・バキチ（トロント大学、コメンテーターを兼任）、生田美智子（大阪大学、司会とコメンテーターを兼任）がパネルをくんだ。司会とコメンテーターは報告者以外が担当しているところが多かったが、われわれのパネルは、組織委員会の了承を得て変則的な形をとった。文化を狭義の文化だけでなく、生活様式、経済活動、政治活動と広義にとらえ、「満洲」（ここでは満洲を歴史的用語として使用するので、以後は括弧をつけない）における亡命ロシア人の生活をさまざまな側面から照射した。バキチ氏は極東亡命ロシア研究の第一人者であるだけでなく、ご本人が亡命者（白軍のアンドレイ・バキチ将軍の孫）であるので、発言に重みがあり、パネルの深みと幅を増すことになった。フロアも含めた活発なディスカッションの中で、ジェンダーの視点を加味する必要があることを確認しあった。その時の報告は伊賀上が『セーヴェル』27 号（ハルビン・ウラジオストクを語る会、2011 年）に掲載し、研究成果は、『満洲の中のロシア』（2012 年、成文社）という形で公表した。今回は、それらを継続発展させ、女性に焦点をあてた「女たちの満洲」と題するパネルを組織する。

パネルの趣旨

満洲を女性の視点から見直すことで、男性中心の従来の研究の盲点を補うとともに、満洲の亡命ロシア女性への全体的な理解がすすむことを意図する。女性を抑圧される客体としてだけでなく、主体的なダイナミズムをもつ存在としてとらえる視点をめざす。

生田美智子：ビジュアルメディアにみる満洲の亡命ロシア人女性：日本人の自画像

本報告では『満洲グラフ』を取り上げる。この雑誌は写真家や画家を動員して芸術性を

誇ったことから、写真芸術、広報活動などの観点からの先行研究が多い。ところが、当時創刊号で標榜した「満洲国新興の実相は又、正義日本の正しき反映」に着目してそれがいかなるものであったのかをとらえようとしたものはない。本報告では、満洲国の女性表象に的をしぼり、建国理念とそれに対応する女性のイメージ、およびそこに反映される日本の自画像を、『満洲グラフ』の中で探してみたい。とくに「民族協和」と「王道楽土」という満洲国スローガンの中における亡命ロシア女性表象に着目して分析する。

伊賀上菜穂：日本語文学における満洲亡命ロシア人女性の表象

本報告では日本語文学に登場する満洲の亡命ロシア人女性の表象を分析することで、日本人あるいはほかの民族と、彼女たちとの関係性を考察する。亡命ロシア人の表象としてもっとも有名なものに、「美しい女スパイ」というものがあるが、農村小説にはこれは当てはまらない。また登場人物もロシア民族以外に、ユダヤ人やアルメニア人などがある。このように満洲亡命ロシア人の表象には、作家の属性、執筆年、舞台などによって、大きな違いがあることが予想される。文学作品に登場する亡命ロシア人以外の女性とも比較することで、亡命ロシア人女性が担わされてきた意味について考えたい。

藤原克美：百貨店から見る満洲の消費社会と女性

ジェンダー研究では、東アジアにおいて、商品広告やポスターを媒介として「モダンガール」像が形成され、実際の消費を通じて「モダンガール」が実在し、また批評家らによってその言説的構築がなされた事実を「日本資本主義の後発的植民地主義的性格」として捉える。そうした先行研究からヒントをえて、本報告では 1930 年代後半の満洲の百貨店の観察から、当地の女性の生活スタイルや心理的变化を捉え、ジェンダー化された植民地主義的資本主義の実態を探る。

エレナ・アウリレネ：在満亡命ロシア女性と政治

満洲における亡命ロシアの歴史全体にわたり、白系ロシアと赤系ロシアのイデオロギー闘争があり、それがロシア社会に緊張をもたらしていた。特に満洲国時代になると日満は、反ソ闘争に亡命ロシア人を利用しようとし、一方、ソ連は領事館やその他の機関を通じて亡命者を赤化しようとした。そうしたせめぎ合いの局面における亡命ロシア女性の生き様を見る。

**"Андрей Белый: соприкосновение Востока и Запада.
К 135-летию со дня рождения."
「アンドレイ・ベールイ 東と西の出会い 生誕135周年」**

＜パネルの構成＞

2つのパネル（各90分）を連続して行い、3時間のセッションとする。

Ч.1. История становления самосознающей души.

「自らを意識する魂の生成史」

司会：太田丈太郎（日本，熊本学園大学）

コメンテーター：村田真一（日本，上智大学）

発表：Henriette Stahl（ドイツ，トリーア大学）

Моника Спивак（ロシア，ベールイ博物館）

Владимир Белоус（ロシア，サンクトペテルブルク大学）*

Михал Одесский（ロシア，ロシア人文大学）*

*は、グラントの取得状況により、変更の可能性がある

パネルの共通テーマ：第一次世界大戦期・革命前後のベールイの西洋観の形成（ルドルフ・シュタイナーを含む）。西洋文化に対するベールイの視点。「文化の危機」，「文化対文明」についてのベールイの視点。

Ч.2. На перекрестке культур: рецепция, влияния, контексты, контакты.

「文化の交差：受容，影響，コンテクスト，コンタクト」

司会：Моника Спивак（ロシア，ベールイ博物館）

コメンテーター：村田真一（日本，上智大学）

発表：太田丈太郎（日本，熊本学園大学）

Park Hye-Kyung（韓国，ハルリム大学校）

鴻野わか菜（日本，千葉大学）

パネルの共通テーマ：ベールイの作品のアジアでの受容，翻訳。ベールの東洋観。

＜パネルの計画・準備状況＞

- ・ 優先して招聘したい外国人研究者を決定→その研究内容とのバランスでパネルを計画

- ・ アジアでの初めての大会であるという歴史的意義をふまえて、日本以外のアジア諸国からも研究者を招聘
- ・ このパネルで招聘する外国人研究者 5 名のうち、4 名はパネル参加の日本人研究者と学術的交流のあった研究者であり、1 名は他の外国人研究者からの紹介。
- ・ その他の方法として、会議や講演のために過去に来日した外国人研究者とコンタクトをとってパネルを構成することも可能ではないか。

ICCEES2015年大会パネルの具体案について

越野剛（北海道大学）

計画：

ポスト社会主義圏における戦争の記憶を比較するパネルを二つ組織する。

戦争記念碑、映画、オーラルヒストリー、文学などを題材にして、旧ソ連、中国、ベトナムなどの異なる地域についての報告をひとつのパネルにまとめる。「女性兵士の表象」「公的記憶と対抗記憶」「ポスト社会主義期における記憶の変容」などのテーマが考えられる。

財源：

科研費基盤 B 「戦争のメモリースケープ」（2013～2016年度）など

メンバー：ロシア研究者3名、中国研究者2名、ベトナム研究者2名、日本研究者1名（美術史）、東欧研究者1名、海外研究協力者4名

問題点：

- ・韓国など東アジアの研究者、日本国内の外国人研究者との連携
- ・使用言語の問題。複数の地域を比較するため、英語にならざるをえない
- ・「中東欧」からの逸脱、東アジアならではのテーマとなりうるか？
- ・他のパネルとの連携の工夫

参考：

これまで企画した、あるいは企画中のパネル例

①

2013年12月13日、北海道大学スラブ研究センター冬季国際シンポジウム

第5パネル：ロシアと極東における第二次世界大戦の記憶 Remembering World War II in Russia and the Far East

司会：平松潤奈（金沢大学）

報告：セルゲイ・ウシャーキン Serguei Oushakine（プリンストン大学） Re-enacting Russia's War: On the Affective Management of History

報告：フィリップ・シートン Philip Seaton（北海道大学） War Memories in Hokkaido: National vs Local Remembering

報告：荒井幸康（一橋大学） モンゴルにおける戦争と日本人の記憶（仮題）

討論者：越野剛（北海道大学）

使用言語：英語

②

2013年9月11日、シンポジウム「戦争の記憶を比較する：ロシア、日本、アジア」（モスクワ、国際交流基金日本文化センター）

第1セッション —比較の視点

- ・田村容子（福井大学）「中国のプロパガンダ芸術における戦闘する女性像」
- ・ゲルマン・サドゥラエフ（作家、ペテルブルグ）「戦争についての散文：生きた証言と体験の普遍化」
- ・向後恵里子（早稲田大学）「肉弾：日露戦争における戦傷兵士のイメージ」
- ・ナギム・ファリド（「民族の友好」誌副編集長）「第二次世界大戦映画における旧ソ連諸民族の描写」
- ・今井昭夫（東京外国語大学）「ベトナムにおける抗米救国抗戦の記憶—ベトナム国内・退役軍人たちの聞き取り調査からの素描」

*使用言語はロシア語（日本語からの通訳あり）、他に基調報告セッション、第2セッションも行った

③

2013年8月9日、第5回スラブ・ユーラシア研究東アジア学会（大阪経済法科大学）

パネルII-1：Representation of War Victims in the Twentieth Century: From Heroism to Atrocities

Chair: Hiroshi Fukuda, Kyoto University (Japan)

Papers: Peter Waldron, University of East Anglia (UK)

“The Image of the Wounded Soldier in Official Propaganda and Popular Perception”

Go Koshino, Hokkaido University (Japan)

“Cultural Representation of the Khatyn Massacre in Belarus”

Eriko Kogo, Waseda University (Japan)

“The Human Bullets: The Images of the Wounded Soldiers in the Russo-Japanese War”

Joonseo Song, Hankuk University of Foreign Studies (South Korea),

“Forging Post-Soviet Regional Identities: The Politics of War Memory in Smolensk”

Discussant: Yulia Mikhailova, Hiroshima City University (Japan)

使用言語：英語